
スーパーガール

六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーガール

【Nコード】

N3484Z

【作者名】

六

【あらすじ】

スーパーガールになりたかった。そうでなければ、せめてみにくくない、普通の女の子になりたかった。

不細工は、目立たず、おとなしく、真面目に生きていくのが一番だ。恋愛も反抗も、普通以上の女の子がやれば絵にもなるうが、不細工がやってもみっともないだけ。そう思っていた英子は、友人に化粧を施されて町に出る。これでは、まるで、普通の女の子みたいじゃないか。奇妙な高揚感に突き動かされて、彼女は歩きだす。

2 自サイト) http://666snowwing.web.fc
2 . com/frame.html(にも置いてあります。

むかしむかしあるところに、エーリというおんなのこがいました。エーリはさんにんしまいのすえっこで、いちばんうえのおねえさんは、むらでいちばんのびじんでした。にばんめのおねえさんは、むらでにばんめのびじんでした。けれどもエーリときたら、どうしたことが、むらでいちばんのぶさいくなのでした。いじわるなおとこのこたちに、「ぶさいくエーリ」「みにくいエーリ」とからかわれても、エーリはいつもこにこわらつていました。

エーリはみにくくても、こころやさしいおんなのこだったので。

*

スーパーガールになりたかった。

美しく、強く、賢く、自分の意思に従って行動し、どんな状況でも背筋を伸ばしてられる人。

スーパーマンの女性版とかじゃなくて、漫画とかラノベとかによく出てくる、なんでもできる強くてクールでかっこいい女性キャラ。不細工で、弱く、頭も悪く、人の意見ばかり気にして、目立たないように過ごす私とは、正反対の誰か。「どうしてそんなに自分を卑下するの」

亜由美は少し首を傾けて私を見た。天然パーマだという髪は芸術的に弧を描き、茶色のカーディガンにふわりと着地する。亜由美のために、神様が風と重力を完璧に計算したみたいだ。

「だって、ほんとうのことだから」

私は亜由美の襟元を見ながら答える。後期期末テスト直前、放課後の教室は締め切った窓から日の光が差し込んで意外と暖かい。運動部の活動の音も聞こえないから、ちよつと不安になるくらい静か

だ。隣のクラスでも何人かが残って勉強しているのだろう、ときどき笑い声が聞こえてくる。

亜由美はかちかちと水色のシャーペンを鳴らして、「英子は頭いいし、運動神経も割といいじゃん」と笑った。笑った拍子に、亜由美の髪がひと房ワイシャツの襟の中に飛び込む。

亜由美はなんでもないように襟の中に入った髪をすりと引き出し、軽く頭を振った。私はその動作を、ほとんど憧れに近い気持ちで見つめた。私が出たらこうはいかない。まず襟の中の痒さに驚き、ぎこちなく髪を引き出しても何筋か襟のなかに残ってしまい、指先で一本ずつ不器用に取り除き、頭を振ればまた髪が乱れてしまう、ということになりかねない。私がこんなに苦労する動作を、彼女たち普通の女の子はなにも考えずにできるのだ。

「いや、違くて……」

「違くて？」

私はずり下がった眼鏡をなおしながら（変な動作にならないように、と思って慎重に動いたらやっぱりぎこちなくなってしまった）眉をひそめて言った。

「私は亜由美みたいに可愛くないし、頭いいって言っても学校の勉強だけだし自分の意見も言えないし暗いしかっこわるいよね、って、はなし」

むやみに早口になったせいで少し噛んだ。亜由美は困ったように微笑んで私を見ている。ああ、この美しい友人を困らせてしまった、と思うと、私は肺の中に黒い石が押し込まれたような気分になった。子供のころから肺の中に溜め続けたその石を、私は自己嫌悪と名付け、歩いたびに揺れるそれを毎日感じている。

どうして亜由美のような普通の女の子にこんなことを話してしまったんだろう、私は。勉強に飽きて話題にした、小学生のころどんな大人になりたかったか、という話から、つい今の自分のコンプレックスまで語ってしまった。恥ずかしい。私は視線を落として自分の指先を見つめた。爪はいびつで平たく、ささくれから血の色が濃

く透けている。みつともない指。第一関節と第二関節の間に、剃りそこなつた細かい毛が生えているのを発見して、思わずそこを強くこすった。

「わたし、別に、かわいくないじゃん」

亜由美はさっきの困つたような微笑みを消して言った。問題集の端が折れたページを爪でこすつて直している。

「え？ いやかわいいよ」

私はお世辞抜きで言った。亜由美は十分にかわいい。クラスで一番とは言わないが、平均よりは絶対に上だ。少なくとも、普通の女の子だ。私のような不細工とは違う。

「いやーほとんどメイクのおかげだよ？ すつぴんで外出れないもん、私」

メイク。言われてみるまで、亜由美が化粧をしているなんて意識したこともなかった。いや、リップを塗り直していたり、睫毛をいじっていたりするのは見たことがあるが、特別、メイクしているからかわいいんだとか、そういうことは考えたことがない。よく見れば、今日も睫毛は上を向いて長いし、頬はオレンジ系統の色をしている。

「ああ……でもまあ、普通にしててもかわいいでしょ」

「お風呂上がりを見たことないから言えるんだよー。眉毛ないし悲惨だよー」

亜由美は楽しそうに笑つて、ノートに意味のない円を描きながら「英子もやればいいのに。メイク。してないよね？」と何気なく聞いた。

「……ああうん、面倒で」

あいまいに笑つて、問題を解き始める。生物のテストは来週の火曜、四日後だ。遺伝子を表すアルファベットを書き連ねながら、胃のあたりをそつと撫でる。今日も胃の調子が悪い。

胃はじりじりと内側から熱くなり、時々どくりと身をよじる。胃が弱いことすら、真面目すぎる証のように思えて嫌だった。カーデ

イガンの上から、痛むところを強く押さえる。この下に内臓が入っている想像すると、何か少し、不思議な気がした。

弱い弱い、私の胃。

私の臓器、と言い換える。

みぞおちの少し下に親指をつきたてる。腹の皮膚に、つぶ、つぶ、指が入るところを想像する。手探りで胃を引きずり出し、中を洗って、荒れた部分を撫でるところを。健康になった胃はもう一度、つぶ、つぶ、と入っていき、元通りになる。私の指が少しぬれるだけ。私の臓器。たぶん、てらてらしたピンク色をしている。

解いていた問題の答えが出たところで顔を上げると、亜由美が私の顔に手を伸ばしていた。ぎょつとして思わず身を引くが、亜由美はかまわず私の前髪を分け、額の辺りをじっと見つめた。

「なにになになに」

「眉毛なんかしてる？」

「なんかかって？」

「切ったり剃ったり」

「してない」

「えーいいな、きれいな形」

きれいな形？ 私は困惑して手元に視線を落とした。問題集に描かれた鶏に、シャーペンが突き刺さっているように見えた。前髪を分けられたせいで視界が明るくて落ち着かない。

亜由美は私の額から手を離して、「よし」とつぶやいた。

「なに？」

「人のメイク用品使うの嫌じゃない？」

「ん？」

亜由美はかわいらしい花柄のポーチを取り出した。

化粧をしたのは生まれて初めてだった。まぶたに得体の知れない液体を塗られ、なぜか下敷きで風を送られ、塗ったところを細い棒

でぐいぐいと圧迫されただけで結構辟易したが、それからさらにいくつのプロセスを踏んだのか、よく思い出せない。肌色のクリームを塗られ、アイラインを引かれ、マスカラを何度も何度も重ねてつけ、それから……亜由美のポーチからはいくらでもいくらでも化粧道具が出てきて、あの中は実は四次元なんじゃないかと疑うほどだった。

普通の女の子たちは、こんなことを毎日やっているのだろうか。亜由美が満足げに「できた」とつぶやいたときは心底ほっとしたが、それに続けて「まあ結構適当っていうか、省略したけど」と言ったのにはちよつと呆然とした。

睫毛が重たい。最後に塗られたリップグロスが気になって爪の先でつついていると、亜由美はその手をとって「触らない触れない」といった。

亜由美はついだからと、私の前髪を分けてピンで留め、ぱさぱさの後ろ髪を手際よくまとめた。鏡はないし眼鏡を取られてしまつてよく見えないしで、何をされているのかさっぱりわからない。

「あーいい感じ！　かわいいじゃん」

「いやなんもわかんないけど……」

「鏡見よう鏡！　これ私結構がんばっちゃったかも」

亜由美は妙に楽しそうだ。すでに問題集は閉じられて、テスト勉強は完全に忘れ去られている。そういえば、女の子というものはやたらと人の髪をいじるのが好きだよなあ、と思いながら、手を引かれて廊下に出る。廊下の突き当たりにある女子トイレに入り、亜由美に背を押されてトイレの鏡の前に立った。

その衝撃を、いったいなんと表現すればいいだろう。

女の子がそこにいた。普段の私のような、女の子のなりそこないではない、町を堂々と歩いている普通の女の子だ。

目の大きさがいつもと違う。ピンクの唇は適度に厚く健康そうだし、前髪を変えたせいかな顔色が明るく見える。にきびの跡はほとんど目立たない。

自然と背筋が伸びた。口の端がゆつくりと持ち上がるのを止められなかった。微笑を浮かべると顔の印象が変わり、積極的で、友達が多くて、よく笑う女の子に見えた。

普通の女の子に。

スーパーガールになりうる女の子に。

亜由美が微笑んでいるのが鏡越しに見える。胃の痛みはいつの間にか消えていた。

きつと亜由美にはわからないだろう。化粧は、普通以下の人間には許されていない。

化粧なんてしたって不細工は不細工なのに、という風潮がある。

電車の中で化粧をしていた女性に対して、同じクラスの男子が数人「電車で化粧つてだけで嫌なのに、不細工で化粧とか周りの迷惑考えろよ、みつともない」と言っていたのを聞いて、私は一生活化粧をするまい、と思ったものだ。

何事も、分をわきまえるべきなのだ。

不細工の癖に、と思われるくらいなら、女子を捨ててる、もったいない、と思われるほうがいくらかマシだ。

自意識過剰といわれてもかなわない。普通以下の人間は、地味に人に好かれようなんて思わず、真面目に生きていくのが一番だ。

化粧だけではない。先生への反抗や恋愛は、普通より上の人間がやれば絵にもなるうが、私のような人間がやっても見苦しいだけだ。そう、私は、スーパーガールどころか、普通の女の子ですらない。きつと亜由美にはわからない。スカートを巻いて短くするのに、こんなに勇気が必要だなんて。

亜由美が帰った後、私はまだもう少し勉強していく、と言って教室に残った。隣の教室からも、もう物音は聞こえない。日は沈み切ったばかりで空はまだ薄明るい。窓から外を見ると、教室の明かりが地面に映って、私の影を桜の木の横に形作っていた。

私はおそろおそろスカートの中のホックのあたりに手をかけた。耳の裏に鼓動をはつきりと感じる。クラスの女の子たちがいつもそうしているように、二回、ウエストの部分を折った。膝上七センチ。いつもは隠れている太ももが見える。大きく息を吸って、もう一度折った。亜由美と同じくらいのスカート丈になる。冷えた空気がスカートの中に入ってきて、痛いほどだ。

落ち着かない。これでは、これではまるで、普通の女の子みたいじゃないか。

もし、自分が普通の女の子だったら、やりたいことがたくさんあった。授業をさぼって、恋愛をして、ふざけながら歩いて。黒板に落書きをして、先生に怒られて、十人くらいでわいわいお昼を食べる。人の目を気にせず服をゆっくり選んで、化粧品棚を見て、友達の悪口を言って、学校帰りにスタバに寄って。

そうだ。この中のいくつかなら今からでもできる。そう思ったらどきどきした。私は今、化粧をしているのだから、大人しくて成績が良くて真面目でつまらない女の子ではない。今、私は別人なのだ。肺に入っていた石がすつと軽くなるのを感じた。そうだ、私は今、別人なのだ。友達が多くてよく笑う、普通の女の子なのだ。頬がかつと熱くなった。心臓はむしる落ち着いて、その考えを何の抵抗もなく受け入れた。

私は知り合いに会わないことを祈りながら、階段を降り学校を出た。とりあえず誰も見当たらない。老人にリードを握られた柴犬が、私の顔をじつと見つめているだけだ。

駅についても、知り合いに会うことはなかった。同じ学校の制服を着た男子とすれ違ってひやりとしたが、知らない人だったようだ。私は家とは逆の方面に行く電車に乗り、指が白くなるほど鞆の持ち手を握り締めた。

大丈夫。

堂々と。

誰も私のことなんて見ていない。

マフラーの中で笑みがこぼれそうになる。まだ五時半だが、とうに日は落ちてほとんど真っ暗だ。だが、これから私が降りる町は、にぎやかで明るいはずだ。ゲーセンと居酒屋とファッションビルがひしめくそこを、私は一人で歩いたことがない。

電車を降りたところで、急に不安がよぎった。亜由美はああいつてくれたし、自分でもかなり普通の女の子に見えると思う。が、ひょっとして、そう思っているのは私だけで、不細工が身の程知らずな恰好をしている、と思われているんじゃないだろうか。人の波に流されながら周りを窺うが、どの人もどの人も無表情か、隣の人と笑っているばかりで、誰も私を見ていない。

改札を抜け、人波に流されるままに歩いて行くと、JRの駅のほうに着く。大きなオブジェの前で立ち止まり、人を待っているふりをして周りを見渡した。普通の女の子の群れ、ぴつたりと寄り添い合ったカップル、「献血にご協力ください」や「自衛隊員募集」の垂れ幕、恐れを知らず人の足元を潜り抜けていく鳩。足元に落ちている煙草の吸殻からはまだ煙が上がっている。

思い立って、友人と行ったことのあるファッションビルに足を向ける。この町では、一度方向を決めてしまえば、人波に流されていれば適当に目的地にたどり着く。それくらいいつ来ても人が多いのだ。とはいえ、完全に都会なわけでもなく、駅から十五分も歩くと急に住宅街に入って静かになる。駅の周りだけが栄えた町だ。

横断歩道を渡って、歩行者天国の道に入る。金髪の男性が私にピンク色のティッシュを差し出しかけて、制服のスカートを見てその手を引っ込めた。

「あ、すみませんティッシュください」

普段より高い声が自然と出たことに、自分でびっくりした。男性は銀色のピアスを揺らして「あっそう？ 高校卒業したらよろしくねー」と言いながらティッシュを差し出した。

受けとって、じっと見つめる。毒々しい色使いで、「お酒を飲みながらお客さんとお話するだけ！ ノルマなし・親バレ彼バレなし・

面倒な人間関係なし！ お試し入店で15000円ゲット」と書かれている。

今度こそ、マフラーの中で笑みがこぼれた。友人と歩いていて、こういう類のティッシュを渡されるのは決まって亜由美たち普通の女の子のほうだ。こういうところで働きそうにない人には渡さないことになっているのだろう。不細工で、真面目そうな女性には。私にこれを差し出した男性の仕草が、頭の中で何度も再生される。にわかに自信が芽生えて、私は背筋を伸ばした。冷たい空気が耳を切って心地よい。

足が軽い。フロアにある店のほとんに入っては商品を眺め、エスカレーターで一階ずつ上がっていく。普段なら絶対に入らないタイプの服屋に入ってみる。店員に話しかけられても、「そうですねーまだちょっと迷ってるんで見てみます」とごく自然に答えることができた。普段なら下を向いて、「あ、はい……」とぼそぼそ答えて黙り込んでしまうところだ。

服や靴や雑貨のお店はどれも、照明が必要以上に明るくて眩しい。このビルは、こんなに美しい空間だったのだろうか。友人と休みの日に来たときは、私服だったこともあり、自分や自分の持ち物と、周りを歩く人々や売り物とを見比べてみじめな気持ちを味わったが、今はこんなに堂々と、楽しんで歩ける。

五階に上がると、エスカレーターのそばに小さな本屋があった。本好きの習性として、どんなに小さくても本屋を素通りすることはできない。普通の女子高生だって本は読む、と自分に言い訳をして、話題の本コーナーに足を進めた。

眼鏡をしていないので、表紙の字が小さいとよく見えない。私はほとんど無意識に目をこすって、違和感に動きを止めた。

目をこすった指先に、黒い屑のようなものが付いている。消しゴムのかさか、ティーバッグの中に入っている細かい茶葉に似ている。

親指とこすり合わせると、黒い汚れが両方の指にしみついた。

マスカラだ。

血の気が引いた。化粧が崩れたら、私には直す方法がない。化粧道具は買えばいいが、亜由美に一方的にやってもらっただけでやり方などさっぱり分からない。

大丈夫なはずだ、と無理に自分に言い聞かせて、当てもなく移動する。大丈夫だ、多少化粧が崩れても、私は今、別人なのだから。普通の女子高生なのだから。文庫本のあたりで足をゆるめ、平積みされた本の中から、何かを探しているふりをする。本棚に並んだ背表紙はどれも黄色く、全部同じに見えてしまう。マフラーに覆われているはずの首筋が冷え、背中と脇の下に汗をかいているのを感じた。額の裏に心臓の鼓動が響いてうるさい。

突然、背後から笑い声が響いた。驚いて肩が跳ね上がりそうになるのを必死に押さえる。

いつでも、笑い声を聞くと自分が笑われているのではないかという気になってしまう。中学のころからだ。そんなはずはない、と言いつつも、反射的に心臓が縮こまる。

私はいま、別人なのだから、何におびえる必要もない。マスカラなんて、よっぽど近くで見ない限りわかるはずがない。そつと振り向くと、私と同年くらいの女の子が五人、固まって笑っていた。全員顔が崩れてくしゃくしゃしている。なにがそんなにおかしかったのだろう。

この子たちにおびえたり、うらやましがったり、自分とは違うと突き放す必要はないのだ、と私は思う。私はいま、この子たち側なのだから。暗く大人しく間違いをひとつも犯さない優等生ではないのだから。化粧して、学校帰りに服屋になんて寄ってみたりする、普通の女子高生なのだから。

「言っただけ、千里ちゃんっているじゃん」

背後の女の子たちの誰かが言った。私は何気なく本を一冊取り、ぱらぱらとめくった。文字を追うが、内容は全く頭に入って来ない。

何の本でもよかった。どうかこの本のチヨイスが普通に見えてほしいと願った。

「千里ちゃんってー、あのー、若干ふくよかな方でしょ？」

笑いをこらえた声が続く。「そうそう、あの、ふくよかな」「ぽつちやり系……」の「肉付きがよくていらっしやる」と、別の声が更に言葉と笑いを連ねる。

「彼氏ができたって話でさ」

「うそお！」

数人の声がかなり大きく響いた。私の隣にいたサラリーマン風の男性が、ちらりとそちらを見た。女の子たちはそれぞれに「声大きい」「騒ぎすぎ」と潜めた声で笑った。

「え、誰？ 西高の人？」

「いや違っつぽい。なんだけど、こないだ見かけて」

「えーどうだった？」

あのね、とその女の子は一秒ほど間を取ってから、「……ある意味超お似合い」と言った。笑い声がまたどつとあがる。

「いやもう、あれだよ、板倉先生レベル」

「え、なにそれハゲって意味？」

「いやハゲじゃないけど、ひどかった。板倉を若くして目細くした感じ。なんていうか……ひどかった」

肩がこわばって、視線が文字を上滑りする。根でも生えたように、足が床から動かない。首筋でマフラーがちくちくする。

「あつてかそうじゃなくて、みーちゃんに聞いたらね、あの子千里ちゃんと元中同じだから。千里ちゃんって中三のときから彼氏いなかったことないんだって」

「えっなにそれ」

「なんか常にいるんだって彼氏。で、仲いい子にはめっちゃ自慢するらしい。でも毎回毎回、その、容姿に不自由な……」

「容姿に不自由！」

今度は低い笑い声が長いこと続いた。床を踏み鳴らしているらし

い音まで聞こえる。隣のサラリーマンは、迷惑そうにそちらを見てから、立ち読みしていた本を置いて本屋から出て行った。

「……そう、アレな感じの男の子ばっか彼氏にするんだって」

「何がしたいんだろ」

「なんか誰かと付き合ってたんじゃない？ 常にさ」

「で結果的に不細工でいらっしやる方と……」

「もうその変な敬語いいから」

「えーでもそんなに誰かと付き合いたいのかな、その男の子たちもさ」

「みじめじゃないのかな」

笑い声が、天井まで届くように響いた。

胃が急にどくつと鳴った。姿勢が悪くなる。喉の奥に何かのかたまりがつかまって苦しい。文章が歪んで文字の体をなさなくなる。並ぶ表紙たちの色だけがいやに鮮やかだ。汚れたローファーに踏みつけられた白い床が、誰かの足跡で汚れている。

手にした本を無理に読もうとして、自分の手が震えているのに気がついた。

足元の感覚が消えて視界がゆっくりと回る。

やりたいことがあつたはずだ。普通の女の子として、やりたいことが、今からでもやれることが。思考が笑い声にかき消されて視界が暗くなる。目に映るものはみんな暗い極彩色で形が歪んでいる。あつたはずだ。何をしようと思っただろう。

普通の高校生がするような反抗恋愛サボタージユ悪口青春軽犯罪。軽犯罪？ 万引き。いじめ。暴力。真面目さの対極にあるもの。

私は今、別人なのだから。後ろの女の子たちとおなじように、普通の、女の子で、だから。

そつだ。喫茶店か、なにかに、学校帰りに寄って。堂々と。本や漫画を、読んで、コーヒーを、飲まなくちゃ。

背後の女の子たちが、またどつと笑い声をあげた。

私は今、真面目でつまらない女の子じゃない。

対極。

私は手にした本を、ごく自然な動作で鞆に入れた。鞆を掛けた左肩に文庫本一冊分の重みがかかる。足元の感覚が戻ってきた。平積みの本の表紙に視線を流しながら、店の出口に向かう。小学生らしき男の子の脇を通り抜け、ぶつかりそうになったカップルに会釈をしてから店を出る。視界はクリアだ。足取りは迷いなく、背筋は伸びて、胃だけが少し、重たい。

駅の裏にミスタードーナツを見つけて、私は奇妙なほど安堵して店内に入った。エンゼルフレンチとコーヒーを買って席についてから、甘いものなんてちっとも食べたくないことに気がついた。頼んでしまったものは仕方ない。熱いコーヒーを冷ましながら、胃を騙し騙し口に入れる。口の中に残ったクリームの甘さをコーヒーで流し込み、私は先程の本を出した。生まれて初めての犯罪は高揚感も罪悪感も薄く遠く、どこか遠い世界の出来事のような気がした。

表紙にはシンデレラと赤ずきんちゃんらしき女性が二人、単純な線とパステルカラーで描かれている。まえがきを見ると、一章にひとつ童話や児童文学を紹介し、それがどのような時代背景のもとにどのような意図をもって書かれたのか、というのを解説してあるらしい。童話を研究している人がいるというのはなかなか不思議な感じがした。そんなことを調べていったい何になるんだろう？

私は本をぺらぺらとめくり、「みにくいエーリ」と題された章で手を止めた。

『むかしむかしあるところに、エーリというおんなのこがいました。エーリはさんにんしまいのすえっこで、いちばんうえのおねえさんは、むらでいちばんのびじんでした。にばんめのおねえさんは、むらでにばんめのびじんでした。けれどもエーリときたら、どうしたとか、むらでいちばんのぶさいくなのでした。』

いじわるなおとこのこたちに、「ぶさいくエーリ」「みにくいエ

「り」とからかわれても、エーリはいつもここにこわらっています。

エーリはみにくくても、こころやさしいおんなのこだったのです。

□

私は少し眉をひそめて先を読んだ。エーリの住む村のそばには古い遺跡があり、そこには牛の五倍ほどもある大きな鳥が住んでいる。その鳥は時折村の畑や家畜を荒らすので、村の人々は恐れ、月に一度食べ物を捧げていた。ある時エーリといじめっこの男の子たち数人で、その鳥に捧げ物を届けに行くことになる。鳥にはくれぐれも近寄らないように、と言われていたのだが、男の子たちは石を投げてからかってしまう。鳥は怒っていじめっこたちを追いまわし、一人を掴んで飛び立とうとする。そこでエーリは鳥の前に飛び出す。

「エーリはまよわずいいました、やめてください。そのひとをばなしてください。わたしがかわりになりますから」と。

□

え？ 私が話の展開についていけないでいるうちに、物語はどんどん進展していく。鳥は人間の言葉を解するのか、いじめっこの代わりにエーリを掴んで巣まで連れていく。エーリはそこで鳥が目には怪我をしているのに気付き、哀れに思って手当てをしてやる。両目とも深く傷ついて視力は戻らないようだが、痛みが止まったのか鳥は大人しくなる。もう大丈夫、と言ってエーリが傷口のそばに口づけると、鳥はみるみるうちに若い男に姿を変える。例によって例のごとく男は呪いを掛けられた王子で、エーリを連れて祖国に帰り、エーリを妻にして一生連れそつた、ということだ。

そんなばかな。私は最後の数行を何度も読み返し、解説にざっと目を通して、結局その話は優しくすることがいかに大事か、というテーマだったことが分かって呆然とした。

そんなばかな。

みにくいおんなののなら、思わなかったはずがない。たとえ一瞬だとしても、思わなかったはずがない。

酷い目に遭ったいじめっこに、ざまあみろ、と。

助けてやるべきか、一瞬だとしても、迷ったはずだ。そのはずだ。むらいちばんのみにくいおんなのこなら。

私は本を閉じ、その表紙に額をつけて机の上に突っ伏した。うつくしい人たちは、うつくしいから優遇され、その分心が豊かになるだろう。同じ行為をしたはずなのに美醜で評価が違うのなんて、よくある話だ。

みにくい者たちは当然のように虐げられる。わたしたちは、ひとつひとつ諦めていく。

みにくいけれど、こころやさしいおんなのこ？
そんな人間はいるものか。

胃が、大きな手に握りつぶされているようだ。外側から握りつぶされながら、内壁は小さな炎でじりじりと焼かれている。瞼の裏に赤や青や緑の靄がうごめいて気持ちが悪い。

本屋の女の子たちは、きつと、「千里ちゃん」がイケメンと付き合ったとしても、「頼み込んで付き合ってもらってるんじゃない？」
「一緒に歩いててみじめじゃないのかな？」と言うに違いない。

普通の世界は、こんなにも、みにくい者たちに厳しい。
みにくいあひるの子が、最後には美しくなるのはなぜだ。個性が大事といいつつ、個性に順列があるのはなぜだ。女芸人がブスだブスだと笑いをとれるのはなぜだ。エーリを妻にした男が、盲目なのはなぜだ。

そういう世界に生きて、一体どうやってやさしくなれというのだろうか。

「お客様」

低い声が聞こえて、私は顔をあげた。男の店員が、おずおずと「ご気分でも……？」と聞いてくる。

私は店員の顔をまじまじと見つめた。輪郭は四角く、肌の色は浅黒く、唇は下品に厚い。顔のパーツが居心地悪そうにそれぞれ収まっている。お世辞にも整った顔立ちとはいえそうにない。私はその店員に対して、憐憫、に近い感情を抱いた。

これが、憐憫。

私は最高に色っぽい表情としぐさで、「大丈夫です、ありがとうございます」と微笑んだ。どうしてそんな表情の作り方を知っているのか分からなかった。一筋の迷いもなく、顔の筋肉はなめらかに動き、自分のできうる最高の、絶妙な表情を浮かべたのを確信した。その証拠に、男の店員は一瞬動きを止め、浅黒い肌に少し赤みを差して、「そうですか、失礼しました」と早口で言っ、去っていった。

普通の女の子に擬態していれば、こんなことだってできる。できて、そして、どうするつもりなのだろう。

スーパーガールになりたかった。それが叶わないなら、せめて普通の、みにくくない女の子になりたかった。

たかが化粧で実現してしまう程度の夢だったのだ。そして実現したあと、私がやりたかったのは、たかが、万引きでしかなかったのだ。

ああ、私は、一生スーパーガールにはなれない。

奇妙にすがすがしい気持ちで、私は天井を見上げた。

胃がどくりと音を立てて存在を主張した。男の店員はまだこちらを見ているようだ。マグカップに、ピンク色の口紅がてらてらと光っている。

(後書き)

いかがでしたでしょうか。

よろしければサイトThe fastened winds)http://666snowwing.web.fc2.com/frame.html)にもおいでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3484z/>

スーパーガール

2011年12月11日22時50分発行